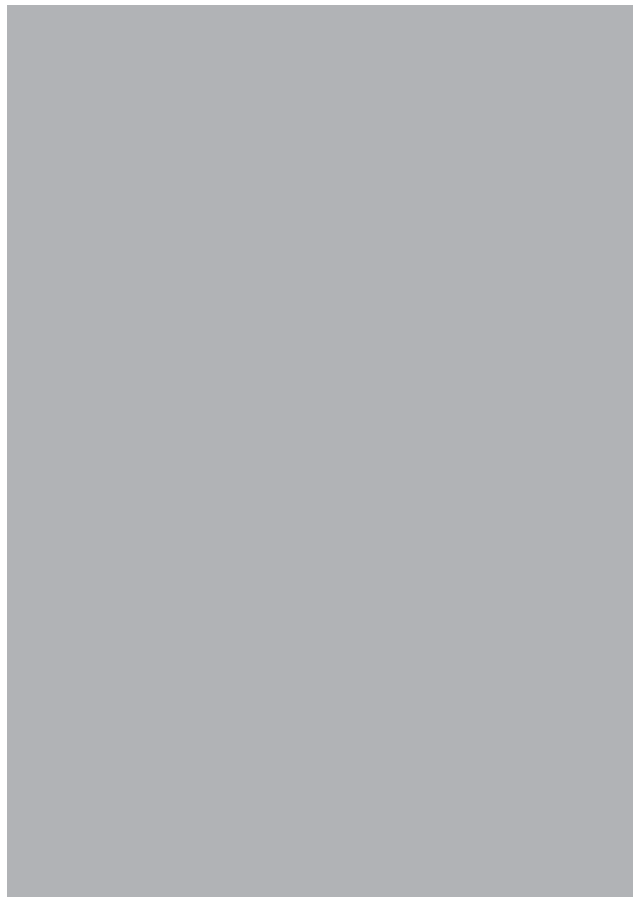


デイヴィッド・スミス 《サークルⅣ》



デイヴィッド・スミス (1906–1965)
《サークルⅣ》

1962年
鉄・彩色
高さ215.9、幅152.5、奥行107.0cm
平成29年度購入
© The Estate of David Smith
Photo: Jerry L. Thompson
Photo courtesy: Hauser & Wirth

彫

刻家デイヴィッド・スミスが一九六二―六三年に全部で五点制作した「サークル」シリーズのひとつを、昨年度収蔵いたしました。

スミスはアメリカ合衆国インディアナ州生まれ。いくつかの大学に通う傍ら自動車工場の生産ラインで短期労働をした経験を持ちます。一九二六年にはニューヨークに移り住みアート・スチューデント・リーグで学んでいます。鉄やステンレスを素材としつつ構築性や開放性を特徴とする彼の作品は、二〇世紀の彫刻を考える上で外すことのできないものとされています。

スミスはシリーズで制作することでも知られているアーティストです（一方で、いわゆる鑄造をしないこともあったりして、彼の作品にはいわゆるエディションという概念は存在しません）。その中でもっともよく知られているのは、磨かれたステンレスを素材とする「キュービ（Cubi）」（一九六一―六五）でしょう。直方体や立方体や円柱を構成要素とするそのシリーズは、純粋性や抽象性を志向するモダニズムの擁護者たち＝理論家たちから絶賛されました。

そうした観点からすれば「サークル」は特異点となりますが、実際はそう単純ではありません。六〇年代のスミスには塗装した鉄板で構成された「ジグ（Zig）」というシリーズもあります（色彩はフラットで、

往々にして単色です）。つまりスミス本人にとって色彩や平面を彫刻に取り入れることは、継続して重要な課題であったはずなのです。

「サークル」のシリーズの特徴は、平面形の中でも完結的な形体である円を取り入れていること、そして複数の色彩をひとつの作品の中で用いていることにあるでしょう。中でも本作は、筆触が際立っている点、円形の内側に開口部がない点（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴには、大きさの違いはあれど円形の内側に円形の穴が開けられています）、多方向性が導入され動きをコントロールしようとしているのが明らかである点において、シリーズの中でも傑出しています。

実は本作は、シリーズの中で最初に制作されたと考えられています。スミスはシリーズにおけるナンバーを実際に制作された順序とは関係なく割り当てることがあり、本シリーズもその例に漏れないというわけです。ちなみにⅠ、Ⅱ、Ⅲは現在ワシントン・ナショナル・ギャラリーが、ⅤはJPMorgan Chase Art Collectionが所蔵しています。本作はスミス本人の手に置かれていた後、エステートの所蔵となっていました。アジアの実作を見る機会がほとんどないという点などに鑑みて、今回、当館が購入できることになった次第です。

（美術課主任研究員 保坂健二期）